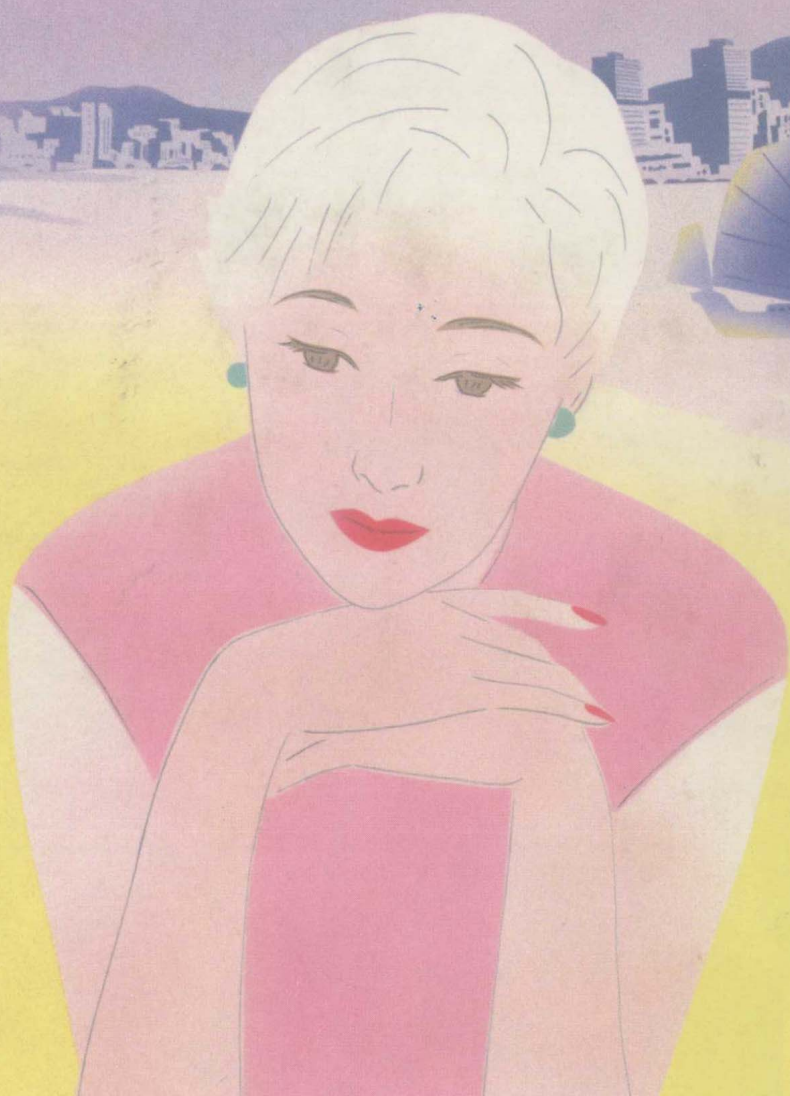


恋愛伝説 LOVE LEGEND 1997

ねじめ正一



恋愛伝説 LOVE LEGEND 1997

ねじめ

江苏工业学院图书馆
藏书章

集英社

著者 ねじめ正一^{しょういち}

れんあいでんせつ
恋愛伝説 1997

1991年11月10日第1刷発行

発行者 若菜正

発行所 株式会社 集英社 〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話 編集部 (03) 3230-6100 販売部 (03) 3230-6393 製作課 (03) 3230-6080
印刷所 凸版印刷株式会社

© 1991 ねじめ正一 Printed in Japan
ISBN4-08-772821-8 C0093

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

恋愛伝説
1997

5

マギーへの恋

71

熱愛星

105

私をキケンにつれてって

125

ジャッキー君の大志

189

恋愛伝説

1997

恋愛伝説

1997

深夜の二時を回ったというのに、靖国通りはひどい混みようだった。

六車線ある車道は上りも下りもタクシーでぎっしりだ。そのほとんどが緑のサインである。有江と同じように終電を酒場でやりすごした男や女が、車道まではみ出して空車を探している。たまに赤いサインの車がくると、歩道から両手を広げた男たちが我がちに駆け寄った。半開きになったタクシーのドアに手をかけて、オレが先だ、いや止めたのはオレだと罵りあっているのだった。

——これじゃあダメだな。

有江修司は小さく舌打ちすると、たった今出てきたばかりの区役所通りへ足を向けた。盆明けの最初の金曜日だ。こんな日にズルズル飲んでいたこっちが悪いのだ。

西新宿のホテルで開かれた学会の懇親会のあと、ひさしぶりに会った友人の井上と「ちょっと飲もう」ということになった。R大の大学院でいっしょだった井上は、修士課程の修了前に別の大学の大学院に移った。R大より格下と言われる大学で、当時は井上のことを都落ちだと陰口をきく連中もいた。成績が芳しくないので移ったのだと、あからさまに言う奴もいた。有江はそう

いう連中とは一線を画していたつもりだが、井上にしてみれば、院生のあいだのそういった陰口は痛いほど身にしみていたのだろう。

まさかその鬱憤晴らしではあるまいが、井上は酒を飲みながら、有江に向かってぐだぐだと自慢話を続けた。来春から、系列の女子大の講師の口を持ちかけられている。ほかに留学の話もあって、どちらにするか決めかねている。留学すれば将来の教授の口は間違いないのだが、収入を考えると講師の口も捨てがたい……。

話半分としても、助手としてR大に残った有江は、どうやら貧乏くじを引いたらしかった。有江に残るように勧めたゼミの教授はおとしの夏心不全で急逝し、新しく学部長になった白井教授とは折り合いが悪かった。いっそのことオレも大学を代わろうか、とも思うが、では学部長の推薦なしでR大以外のどこへ行くかと考えるとそれもままならない。井上と別れたあと、こんな時間までひとりで飲んでしまったのは、そんな憂鬱な気分がわだかまっていたからだ。

花園神社を抜けて明治通りに出るか、このまままっすぐ歩いて職安通りからタクシーを拾うか。少し考えて、有江は職安通りまで出ることにした。靖国通りがああ混みようでは、すぐそばの明治通りも同じようなものだろう。盛場から少し離れた職安通りのほうがタクシーは拾いやすいし、ダメなら大久保通りまで歩く手もある。

ビルのコンクリートが蓄め込んだ昼間の熱気にエアコンの排熱が加わって、深夜なのに空気が

蒸し暑かった。風がまるでないので、暑さと湿気が皮膚にべったりと張りつくようだった。歩きながらネクタイをはずし、小さく丸めて手に持った背広の上着のポケットに突っ込んだ。ネクタイも背広も、一年にかぞえるほどしか着ない有江である。その分暑さがこたえるのかもしれないと、すれちがうサラリーマンを見ながらふと思う。

しばらく待ってみたが職安通りはやっぱりダメで、うろろしながら大久保通りまで出たときには、腕時計は二時半を回っていた。

この時間になるとさすがにピークはすぎて、車は流れるように走っている。下り車線のタクシーは客を乗せた緑のサインが多いが、それでも五分も待てば空車はつかまりそうである。ワイシヤツのポケットからタバコを出してくわえると、有江は市ヶ谷の方向に目を向けた。きたきた、赤いサインの空車だ。

有江が手を上げるか上げないうちに、タクシーがスピードを落とした。あれ、と思うまもなく一〇メートルほど手前でタクシーが止まり、開いたドアに向かって女が近寄るのが見えた。車道ばかり気にして気がつかなかったが、先客がいたのだ。

「ちえっ」

舌打ちして、有江は靴の先でタバコをもみ消した。こんなことなら、市ヶ谷方向へもう少し歩いておくのだった。

女がタクシーに乗り込んだ。ドアが閉まった。しかしタクシーは発車しない。見ると、運転手はカラダを後部座席のほうへねじって、客の女と何やら話しているようである。片手でハンドルを握ったまま後ろを振り向く運転手と、その運転手に顔を近づけるように身を乗り出す女が、あとからあとからくる車のライトで黒いシルエットになって浮かび上がっている。

運転手が大きく手を振ったかと思うと、ドアが開いた。女がしぶしぶといった感じで車を降りた。乗車拒否である。車を降りた女はぐいっとアゴをそらすと、シヨルダーバッグを抱え直して足早に歩道に戻っていく。ボタンとドアを閉めて、タクシーが徐行を始めた。運転手は有江が立っているのに気がついたらしい。徐行を続けると、ゆっくり有江の前に止まって、またドアが開いた。有江はちらつと女のほうを見た。女もこっちを見ていて、有江と目が合うとさっと視線をそらせた。

「お客さん、どっちまで」

運転手が窓から顔を出す。五〇がらみの運転手は濃い八の字眉毛と大きな口をして、そうたちの悪い人相ではない。

「保谷さんだけど……」

開いたドアに手を掛けながら有江は口ごもった。

「手前の客を断わっただろ。なんだか気が引けるな」

「ああ、あの」

運転手が苦笑いした。

「いえね。べつに乗車拒否をするつもりじゃなかったんだけど、言っていることがよくわかんないんで。中国人らしいんですよ」

「中国人？」

「ナリコウ、ナリコウって言うんですがね。何を言ってるんだかちんぷんかんぷんで。夜中かわいそうだとは思うんだが、行き先がわからないんじゃないかねえ。このところ新宿近辺にや、ああいうのが多いんですよ。歌舞伎町で働いてるらしいね」

そんな話は有江も聞いたことがある。しかし、女は水商売には見えなかった。着ているものが水商売らしくなかった。白い袖なしのブラウスに白いスラックス、靴もぺたんこのサンダルで、持っているショルダーバッグもバッグというより布製のカバンである。だいいちさつき見た顔には、まるで化粧つ気もなかった……。

「悪いけど、ちょっと待っててくれないか」

有江は運転手に断わると、小走りで女に近づいた。女はあきらかに有江を無視して、かたくなに顔を市ヶ谷方向に向けている。

「失礼ですが」

有江は北京語で話しかけた。女が振り向いた。とつぜん知っている言葉で話しかけられてびっくりしているようだが、表情にはまだ警戒心が見てとれた。

「さっきの運転手、あなたの行き先がわからなかったようなのです。よろしければ通訳します
が」

専攻が華僑経済なので、北京語はあまりうまくない。それでも言いたいことは伝わったらしく、女が小さくうなずいた。近くで見ると、女というよりまだ少女のような、若い娘だった。酒の匂いも香水の匂いもしないのは、やはり水商売ではないらしい。

「ありがとうございます」

娘の北京語は、しゃべり慣れていないらしく、アクセントが少しおかしい。中国本土の人間ではないな、と有江は思った。

「私、ナリコテンジン、行きたいのです。ナカノの少し手前です」

「英語の方がいいですか」

笑いながら有江は言った。

「ええ、できれば」

娘も笑った。緊張がすうっと溶けていくのがわかった。いっしょに歩いてタクシーまで戻る。先に乗る、娘を手招きして横に座らせると、

「成子天神だって」

運転手にそう告げた。

「近くまで行ったらオレが通訳するから、回り道になるかもしれないけど乗せてってやってよ」
「そりゃかまわないけど……。お客さん、中国語できるんだ。たいしたもんだね」

運転手が感心したように言った。

「いや、この人には中国語より英語のほうがわかるみたいだよ」

「驚いたね。じゃあ、二カ国語がしゃべれるんだ。これからは国際化時代だから、タクシーの運転手も英語ぐらいできなきゃダメかねえ」

不機嫌になられるのではないかと思っていたが、イヤな顔もせずにギアを入れる運転手は、言葉がわからずに娘を降ろしたのを、内心では気にしていたようである。ホッとして、有江は娘の方を向いた。さっきは申し訳なかったとドライブパーが謝っている、と英語で娘に伝えると、娘は「どういたしました」とたどたどしい日本語で言って、またニッコリした。まるで花が咲いたみたいな笑顔だ、と有江は思った。

「お国は台湾ですか」

「え？」

「僕と同じで、北京語があまりお上手じゃないから」

「残念でした。香港です」

娘が笑いながら答える。あでやかというより、白い菊の花のような可憐な感じの笑いである。

「なあんだ。じゃあこつちで話しかければよかった」

有江は広東語で言った。娘が目を丸くして有江の顔を見た。

「さっきの北京語より、広東語の方が少しはマシでしょ」

「ええ。それに英語より……」

娘はまた笑った。くすつと、それこそ菊の花びらがこぼれるように。

「香港の方なら、英語は日常語ですものね」

「でも、日本で広東語をしゃべる人って少ないでしょ」

「英語をしゃべる人間も少ないですよ。学校じゃ義務教育になってるけど」

車は大久保通りを左折して、青梅街道の方角へ向かっている。

「そろそろ成子天神の裏あたりになるけど、どうします。いったん青梅街道へ出ますか」

運転手が言った。有江としゃべりながら外を見ていた娘が、「この辺でいいです」と有江のほうを振り向いた。

バッグから財布を取り出そうとする娘を「どうせ通り道だから」と押しとどめて、タクシーから降ろす。

「お住まいは近いんですか」

「ええ。この路地を入ってすぐですから」

「気をつけて」

「ありがとうございます。ほんとに助かりました」

ていねいにおじぎをして、娘が路地へ入っていく。角を曲がるとき、娘はこっちを振り向いて、小さく手を振った。手を振り返して、有江はＵターンするタクシーの座席に寄りかかった。バックミラーに娘の後ろ姿がちらりと映って消えた。

「きれいな娘さんだったね」

運転手が言った。

「言葉はわかんないけど、あの娘さんにはなんかこう、品ってもんがあったよ。うん、いい人助けだった」

運転手はひとりでうなずいている。目をつぶってそれを聞きながら、井上と別れてからのわだかまりがいつのまにか消えているのに、有江は気がついた。助けられたのはこっちかもしれない。あの、花びらのこぼれるような笑いに……。有江はぼんやりとそう思った。